

草津市立矢倉小学校通信 令和3年12月1日 NO.14



やぐら通信

～ひとみキラキラ豊かな心と体の矢倉っ子～

心の寄せ方ひとつで

年の瀬が近づくにつれてサンタクロースがあちこちで活躍します。

小学校のとなりの矢倉幼稚園でも、毎年のようにサンタクロースがやってくるという。…子どもたちはサンタさんのことを心待ちにしているんですよ。サンタさんにお手紙を書いてみたり、いつもと違うことが起こったら、これはサンタさんがしたのかもしれないと言い出したりとね…。子どもたちがサンタクロースといっしょにわくわくしながらすごしている、そんな毎日のようすを園長先生からお聞きした。聞かせてもらううちに、サンタクロースは確かにいて、私たちの心を豊かに耕し育ててくれている、そう思えてくる。

同様のことは、サンタクロースでなくても、ことあるごとにその人に心を寄せながらすごす、そのくらし方にも見出せるのではないか。

私が子どもだった頃のこと。斎藤隆夫[※]が、サンタクロースのように活躍していた。大人たちが集まり、世の中の動きをどう見るか、自分たちのまちづくりをどうするか、こうしたことに話が及ぶと決まって登場するのである。斎藤隆夫を、先生と呼び、先生はこう言っておられたと大人たちは真剣に語るのだ。その語り口は、さっきまで一緒にいて話をし、そこで聞いたことをみんなに報告するかのようなものだった。子どもの私は、てっきり斎藤先生という人が町内のどこかに住んでいて、国会が開かれている東京から時々、近所の自宅に帰ってきているものと思い込んでいた。

父が亡くなり、しばらくたって帰省した折のこと。父と親交のあった郷里の方々にお出会いすると、決まって、…いつもいつも、気にかけてもらっておりましてな、この前は、どうや、大丈夫かと私のところまで訪ねてきてもらえました。夢の中のことですけど…などと、そんな父の話をしてくださる。最後の「夢の中のことですけど」が無ければ、まだ生きていて、そこここに出向いていてもおかしくない話だ。

過日、母が亡くなった。ずいぶん前から寝たきりで、たまに帰省してもうまく会話もできずにいたものだから、何とはなく別れを覚悟し、寂しい思いをしていた。ところが、野辺に送り出し、前後して近しい者が集って生前の母のことを語り合ううち、元気なころの母のふるまいがありありと感ぜられるようになっていくのである。元来、言いたいことを口にし、みんなが集まるようにぎやかさが好きだった人柄が、語り合ううちに活躍しだしたのかもしれない。

姿、かたちがあろうがなかろうが、私たちは心の寄せ方ひとつで、生き生きとしたはたらきを受けとり、日々のくらしを豊かに耕していくことができる。実にありがたいことだ。

大林 道範

※斎藤隆夫：戦前に活躍した政治家。天皇の名を盾にして、横暴をふるう軍部独裁に対し、激しく抵抗した。